２　女盗賊たちに全裸に剥かれて短小包茎を笑われ、金責め尋問を受ける

「尋問だよ。用意して！」
「まて、本当に書状はあるんだ！」
「無いだろ！」
　手を離すお菊。
　これ以上は潰れると判断した。
　いや、潰れるというよりダメージが大きすぎて尋問に差し支えるとの判断だ。
　大きく息をつく鬼三太。
　睾丸を強烈に圧縮され、恐怖と痛みで全身にびっしょりと汗をかいていた。
　と、その汗で手を滑らせながら、紐の下に指を入れるお菊。
「お、お前……」
「この中に書状がないか見てやるよ！　ついでにお侍がどんな立派なおチ〇ポしてるのかもね！」
　それは興味があるものが結構いた。
　近くの村人らとたまに交流する女盗賊たちだが、侍とは縁が無い。
　元々上流階級出身でもないのだ。
　売春婦をさせられていたときには、侍らしい客をとった者もいる。
　が、実際の所侍だかただの武芸者か分からない。
　今目の前にいるのは、どうやら侍らしいことは確かだ。
　なぜかわけのわからないことを言ってもぐりこんできてはいるが。
　白い布が中に舞う。
　隠そうと腕を動かす鬼三太。
　だが縛られては、膝を多少締めるだけだ。
　それでは、男の部分は丸出しにならざるを得ない。
　女盗賊たちの目線が一点に集中する。
　一瞬後、
「あ、小さい」
　誰が、見ればわかることを言う。

「ちょっと、縮んでるんだよ。普段はもっと……普通ではあるはずだよ」
「そう？　普通縮んでてももうちょっとあるよ。埋もれきってるじゃない」
「先っぽも小さいし」
「っていうか皮ごっついわね！　超包茎チ〇ポ！　そこだけ見るとでっかいのはいってそうなのに！」
「包み紙だけというね」
笑いが広がる。
急所を握り潰されて縮み上がっていた一物が、さらに縮む。
隠し続けていた短小包茎の三重苦を大勢の女たちの前で白日の下に晒される。
そしてそれらを明け透けに嘲笑される状況に鬼三太は頭がまだついていっていなかった。
「小指みたいよ」
「ホント、チ〇チ〇細いわ」
「処女でも安心ね。お栗どう？」
何だかんだで機会を逃し、いまだ処女のお栗。
どう反応していいのか分からず、曖昧な声を上げるだけだった。
そこでやっと、鬼三太が表情を変える。
絶望としか言いようが無い物に。
そのまま放ってもおけないと思ったか、お菊が近付く。

「ああ、
別におチ〇ポが小さいのは
価値がないと思っているわけ
じゃないよ？」

お菊が鬼三太の肩を叩く。

「ただ、おチ〇ポ小さいのは
笑える話だな、
とは思ってるね。
だっておチ〇ポが
小さいんだぞ？」

個人の感想です。

「ああ、別におチ〇ポが小さいのは価値がないと思っているわけじゃないよ？」
お菊が鬼三太の肩を叩く。
「ただ、おチ〇ポ小さいのは笑える話だな、とは思ってるね。だっておチ〇ポが小さいんだぞ？」
個人の感想です。
少なくともお栗は笑う気は無かった。
「みんなやめましょうよ。おチ〇チ〇小さいぐらい。立ったら大きいのかもしれませんし」
「あんた短小おチ〇ポ見ると常にそれいうね」
半ば本気で感心しているような感じのお菊だった。
が、すぐ笑う。
「でも、「立ったら実は大きいかも」って言うのは、おチ〇ポ小さいのはダメっていってるのと同じじゃないかい？」
黙りこむお栗。
別にそういう気はないが、そういっているも同然という気はした。
黙って、踵を返す。
砦を出て行くお栗。
「あら……怒っちまったか。このぐらいで怒るなんて珍しいね。ま、どうでもいいか」
言いながら、後ろ手に縛られて前を隠すことも出来ない鬼三太を押す。
「さあ、こっちにきな、尋問だよ」
地下室があるでもない。
奥の、敵が来た場合あっさり奪還されにくいと思われる小屋に連れて行くだけだ。
そこの梁から綱を吊り下げ、後ろ手に縛られている鬼三太のわきの下辺りに通して引き上げる。
吊り下げはしないが、倒れもしない吊り方だ。
一番体力を使いそうな縛り方だが、梁とその周辺の強度に自信がない事がその吊り方を選択させた。
縮んだ一物すら丸出しの全裸で半端に吊り下げられ、周りには刀を差した女たち。
鬼三太はその意味不明な状況にやはり頭が付いていかない。
「あんた、目的はなんだい？」
そう聞かれても、答えようが無い。
「今度の戦に、この砦の頭領の力を借りたいと主君が……うぐっ！」
腹にお菊の拳が減り込む。
「本当はあんた、どこの誰なんだい？」

嘘はついていない、隠し事もしていない。だから何の情報も出せないで殴られる鬼三太。
しばらくして、お菊や周りの女たちは疲れを覚え始める。
「まったく、強情な奴だね……」
「だから、はじめから本当のことを……」
「しかたない、こうなったらアレしかないね」
左右の女を見るお菊。うなづく女たち。
「なにを……あ、お前らまさか……」
真っ青になる鬼三太の両足にしがみつく女二人。左右に引っ張る。
「白状しないから悪いんだよ。これから……男なら絶対耐えられない尋問してあげるよ」
限界まで縮んだ股間に優しく手を触れるお菊。
「この大事な男の、金のタ○タマへの責めだよ。さあ、その前に吐くんだ、そのほうがあんたのためだよ」
「吐くって、なにを吐くんだ。全部話してるんだぞ」
「それじゃ、キ○タマが潰れる前に白状しなよ！」
下がる。
脚を振りかぶる。
「キ○タマ蹴りだ！」
「ぐむうう！」
パン、と高い音を立てる。
が、お菊の脚は半ば以上太股の横に当たっていた。
玉へはまだ間接的な衝撃だ。
それでも打撃にはなるし、恐怖は実際に蹴られるのと変らない。
「さあ、キ○タマ大変だよ。吐きな。……そう、ならもう一発だ！」
今度は真ん中、ちょうど竿の下に足の甲。
音は小さい。
腰に当たらない程度に、ふり上げを加減していた。
それでも、両玉に直撃である。
白目を剥き、体を仰け反らせて声も上げられずにのたうつ鬼三太。

「……これだから嫌なんだよ、キ〇タマ責めは。付いてないこっちまで縮み上がっちまう」
しばらく待つ。
「さあ、もういいだろ？　キ〇タマ潰れてからじゃ遅いよ」
腫れ始めた肉袋をさするお菊。
袋は腫れ、一物はほとんど皮だけになるほど縮んでいた。
「小さくてもやれるなら十分価値あるチ〇ポなんだ。だがキ〇タマが無くなったらどうするんだい？」
「わ、わかった、俺がそれだ」
「ん？」
「お前が考えてるそれだ。なんなんだ、それは？」
「なんだ、嘘つく気かい」
離れる。
「残念だよ。次は片金いっちまうかもね！」
「や、やめっ」
「キ〇タマ全力蹴りだよ！」
「おごおおおおおおおおおおお！」
浮き上がる。
ぐったりして、紐にぶら下がっていた鬼三太。
それがお菊のキ〇タマ蹴りの衝撃を殺そうと死力を尽くして爪先立ちになった。
そこを、さらにお菊の蹴りが上に持ち上げた。
二個玉直撃。
ちょうど中心に入った。
脚の甲が二つの肉玉を左右に分断する。
泡を吹き、狂乱の体の鬼三太。
「やりすぎたね……これじゃ。キ〇タマ二個とも潰れちまった、死んじまう」
肩を落とすお菊。
しばらくして、ぐったりした鬼三太の股間を女が調べる。
「姉さん大丈夫みたいです。両玉ほら、形保ってますよ」
「ん……こりゃ運がいいね」
ちょうど真ん中だったのが幸運だった。
半端な角度なら、左右どちらかは確実に粉砕されていただろう。
それだけの威力がある蹴りだった。

「生きてるかい、短小鬼三太殿」
「お、俺は……」
「今のは幸運だったけど、もう一回はないよ。キ〇タマ潰れたらどうなるか想像しな」
股間に手をやる。
「最後の機会だ、吐いちまいな」
「は、吐く」
何とか、助かりたいと思う鬼三太。
最早細かいプライドなどにかまっている余裕はない。
そもそも、何の成果も上げていないただの若者にどんな守るべきプライドがあるのか。
話してしまおう、と思った。
だが話すことはないのだ。
黙っているしかない。
お菊が頭を振る。
「……そうかい、じゃあ、最後の金蹴りだ」
柱に縛った紐を刀で切らせる。
地面に転がる鬼三太。
その両足を掴み、開かせるお菊。

この時代電気あんまはないが、
その形の構え。

ぐにゅ、と優しく鬼三太の
腫れ上がった股間を踏む。

「これを始めたら、止まらないよ
玉が潰れるまで踏み、
キ〇タマ二個とも踏み潰す、
嫌なら吐くんだ」

「き、聞いてくれ、俺は知らない
んだ」
目を吊り上げるお菊。

この時代電気あんまはないが、その形の構え。
ぐにゅ、と優しく鬼三太の腫れ上がった股間を踏む。
「これを始めたら、止まらないよ。玉が潰れるまで踏み、キ〇タマ二個とも踏み潰す、嫌なら吐くんだ」
「き、聞いてくれ、俺は知らないんだ」
目を吊り上げるお菊。
戦いの場で一気呵成に玉を握り潰すのとは違う。
動けない相手への玉責めはまともな女性であるお菊にとっては酷く精神をすり減らすのだ。
だが必要ならやる。
仲間のためなら。
「なら、これで終わりだよ。……最後まで粘るなんて、あんたおチ〇ポは小さいが、男だったね」
「ち、違う……」
「あんたの男気に免じてこのキ〇タマ、一思いに潰してやるよ！」
足を引く。
勢いよく、叩きつけ、鬼三太の肉玉を踏み潰す。
短小包茎、ついでにそれを隠すために女と距離を取っていたので当然童貞という四重苦の男。
せめて三重苦になることは可能だっただろうが、そうならずにここで一巻の終わり。

「待ってください！」
お栗。
妹分の声に、寸前で足を止めるお菊。
人は聞きたい事だけを聞くという。
誰かに止めて欲しいと思っていたお菊にとって、お栗の言葉はよく耳に届いた。
部屋に走りこみ、鬼三太の惨状を見て頭を振る。
「ああ、鬼三太殿。ふぐ……大事な所、大丈夫ですか？」
「ふ〇りぐらい言ってもいいでしょ？」
こんなときだが、半端に上品なお栗に苦笑するお菊。
それに対して、懐から紙を出すお栗。
「書状、ありました！」
「なんだって？　ありましたって」
「その人がその……立ちアレしてた場所に、落ちてたんです」
「……立ち小便したときに書状落としたって？」
そんな間抜けな侍がいるのか。
しかし、お栗が書状を偽造するわけが無い。
「……治療してやりな。キ〇タマ念入りに冷やしてやるんだよ」
竿が超控えめな分、鬼三太の肉玉は性能がいいようだった。
潰れてないとはいえ、ダメなんじゃないかと治療した女たちは思ったが、その日のうちに腫れはほとんど引いた。
そしてその場ではわからなかったが、子種を作る機能なども問題はなく、数日で腫れも引いて元通りになった。
ただ、よく分からない誤解で潰される寸前までいった心の傷はそうそう癒えるものでもなかった……

体験版終わり

前後が気になった方は製品版をよろしくお願いいたします。